

暑けれど佳き世ならねど生きようぞ

藤田湘子

平成十二年、西暦二〇〇〇年作。六月六日に飯島晴子の亡くなった年でもある。朝日新聞七月三十一日の「天声人語」に、お粗末な組閣人事に警鐘を鳴らした文章の締め括りに引用され、話題となった句。

たしかに佳き世ならざる様相ではある。しかしそれはどの時代のどの世にも言えることで、新型コロナウイルスのパンデミックに翻弄されている現在は、地球上の全人類を分断し、さみしくさせている。死にゆく人を抱くことも出来ず、病と孤独にたたかう人を見舞うことも出来ず、何かがおかしいのにだれも声を上げず、粛々と国家の規制に準じている。加藤楸邨の「暮誰かものいへ声かぎり」が頭の中で鳴っている。でも「生きようぞ」。

2000年 (H12作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京